

ペルー日系校において「日本帰り」であるということ

—日本語教育と日本滞在経験を持つ生徒の位置づけ—

山崎由理

(東北大学大学院教育学研究科／コロンビア大学大学院ティーチャーズ・カレッジ)

はじめに

1990年代に加熱した日系ペルー人の日本への「出稼ぎ」現象によって、ここ10年ほどの間に日本生まれ、あるいは日本滞在経験のある児童生徒の姿がペルーの学校現場に増加している。本報告では、リマにある日系人中学校を事例に日系校特有の日本語教育と学校文化の中で、日本からの帰国生徒たちがどのような存在として位置づけられているのか、3ヶ月間の現地調査から明らかにする。まず、1)日本滞在経験および帰国の条件などにおいて様々なバックグラウンドを持つと思われる帰国生徒たちが、日系校で慣習的に行われている日本語教育においてどのような存在として位置づけられているのか、次に2)帰国生徒自身は与えられた位置づけとどのような折衝を行なっているのか、彼ら自身の言語や文化的資源との関係に焦点を当てて検討する¹。

調査場所と研究方法

日系校Aは小学校と中学校を併設する私立校で、全校生徒の約7割を日系人が占めている。同校では、ペルーの一般校とほぼ同じカリキュラムに沿った教育に従事する一方、長年にわたって継承語としての日本語教育が実践されており、全学年でほぼ毎日日本語の授業が行なわれている。さらに朝礼でのラジオ体操の実施や運動会の開催など、日本の学校文化の継承も続けられている。しかしながら、A校はバイリンガル校ではなく、実際一部の帰国生徒と日本語教師を除く成員の大多数はスペイン語のモノリンガルである。

報告者は2005年6月から8月にかけての3ヶ月間、計48日A校を訪ね、午前8時から午後3時まで日本語クラスを中心とする授業および学校行事の参与観察を行った。そのうち教室での参与観察は125時間をしめている。なお参与観察の補足データとして、昼食時や休み時間、放課後を利用して、教師や生徒とのインフォーマルな会話を通して情報を集め、またキー・インフォーマントとなった5人の帰国生徒に半構造的なインタビューを行った。

結果

調査当時、A校の帰国生徒の占める割合は小中合わせた全校生徒のほぼ3割であった。

¹ なおこの場合の位置づけとは、日系校という特殊な学校文化と教育の中で生み出される特定の категорияやラベルといったものが個人に適用されることによって、彼/彼女がある特定の存在として見なされるようになる、アイデンティフィケーションの行為を指す (Holland and Lave 2001; Wortham 2004)。

中学校には23人の帰国生徒が在籍していたが、そのほとんどが小学生の時に帰国しており、一見したところ日本滞在体験のない他の生徒との間に、言動などにおける差異はないように見えた。しかしながら、彼らが依然として一般生徒から差異化される場となっているのが、毎日の日本語授業であった。中学校における日本語授業は、日本語レベルによってグループ分けされており、授業も別々に行われていたが、帰国生徒のほとんどは日本語教師から「日本帰り」という呼び名で特定され、上級グループに配置されていた。さらにこうした「日本帰り」の生徒には、日系人コミュニティで毎年行われる日本語スピーチコンテストへの参加や日本語検定試験の受験が奨励されていた。

クラス分けの最も重要な尺度となるのは、当然ながら日本語のレベルであるが、実際は同じ上級グループ内でもそれぞれの生徒の日本語維持レベルにはかなりの差が見られた。しかし、日本語のレベルにかかわらず帰国生徒の授業への参加態度は消極的であり、日本語学習に関して教師が「日本帰り」に求める期待と実際の生徒の能力やモチベーションの間には大きなギャップがあることが分かった。

しかし、教室の外では帰国生徒同士で日本のアイドル雑誌や漫画、音楽CDなどの交換が日常的になされており、彼らは日本のポップ・カルチャーを通して教室では教わらないインフォーマルな表現や流行語を吸収しているようであった。また、そうした漫画やアイドル歌手のCDを互いに貸し借りしたり、それらについて語ることによって帰国生徒たちはかつて日本にいたと言う経験を共有しているようでもあった。さらに、大衆文化を通じて学んだインフォーマルな表現を授業の中で用いて教師を辟易させたり、教室に日本のバラエティ番組やアニメの録画ビデオを持ち込み、教師を説得して授業中の鑑賞を承諾させるという行為も観察された。この出来事から示唆できるのは、帰国生たちが自らの言語・文化的資源を用い退屈な授業を余興に変えることによって、教室で教わるフォーマルな日本語に挑戦するとともに、消極的授業参加者から積極的な参加者へと自らの位置づけを変化させていたということではないだろうか。

考察

帰国生徒の日本語能力はたとえそれが高いレベルであったとしても、慣習化された日本語教育において彼らの資源として完全に機能しているわけではない。にもかかわらず、A校の帰国生徒たちは帰国後何年たっても、可視的にかつて日本に滞在し日本語が得意であるはずの生徒として位置づけられていた。そして日本語教師の使う「日本帰り」という言葉は、こうした他の生徒たちから差異化された生徒を総称するカテゴリーとしての役割を担っていたのである。しかし、その一方で上級クラスに配置された帰国生徒たちは、日本語クラスへの消極的参加によって、自らを教師が期待する日本語学習者としての位置づけから切り離そうとしていた。さらに彼ら自身の言語実践や文化的資源、この場合はインフォーマルな表現や大衆文化のアーティファクトを用いて、教室で教わる日本語や自らの位置

づけに抵抗している様子うかがえた。このような実践を通して、彼らは日系校が従来維持してきた特有の日本語教育や行事に挑戦するだけでなく、それを通して「位置づけられた」アイデンティティ (Holland et al. 1998) に対抗する新たなアイデンティティを発展させていたと解釈できるかもしれない。

今回の調査では、学校現場において多様で流動的な存在である生徒たちが、教師から与えられたイメージを受け入れたりはねかえしたりする様子を報告することで、かつての在日日系ペルー人子弟のその後の様子だけでなく、彼らを受け入れる側の反応の一例を報告できたのではないと思われる。また、日本からの帰国生徒たちのそうした営みの結果、将来的に日系校の日本語教育や学校行事を含めた学校文化そのものが変化していく可能性もあり、この点について今後さらに調査を重ねて検討していきたいと考えている。

【参考文献】

Holland, D., Lachicotte, W. Jr., Skinner, D., & Cain C. (1998). *Identity and agency in cultural worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Holland, D., & Lave, J. (2001). *History in person*. Santa Fe, NM: SAR Press.

Wortham, S. (2004). From good student to outcast: The emergence of a classroom identity. *ETHOS*, 32(2), 164–187.